



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば

受難の主日 C年(2022年4月10日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 50章4—7節

四句節の最後の主日は、「受難の主日」と呼ばれています。

ユダヤ人の過越祭を間近に控えて(ヨハ12章1節、12節参照)、イエスは、エルサレムの町に入られました。すると大勢の群衆は、「イエスがかつてのダビデ王のように、『イスラエルの国を復興させる王』として君臨するためにエルサレムに來られた」かのように考え、自分の服や木の枝を道に敷き、「ダビデの子にホサナ(ヘブライ語の喜びと勝利の叫び声)」と叫んで、イエスを歓迎しました。このことにちなんで今日でも、ミサの始めに棕櫚やオリーブなどの木の枝を祝福し、それを手に持って行列しながら、主のエルサレム入城の出来事(ルカ19章28—40節)を記念します。この主日が「枝の主日」とも呼ばれるのは、そのためです。

しかしイエスがエルサレムにおいてになったのは、使徒たちに何度か予告していたように、十字架にかけられて殺され、すべての人の身代わりとなって、自分のいのちをささげるためでした(マタ20章28節参照)。この受難の出来事を追憶するために、この日の福音では、キリストの受難の朗読が荘厳に行われます。これに合わせて当日は、キリストが流された血を思わせる赤色の祭服が用いられます。そして信者は、祝福された木の枝を各家庭に持ち帰ってよく十字架にさしますが、これは人類のために、十字架の木によって死を打ち滅ぼし、「正義の若枝」(エレ33章15節)として復活し、永遠のいのちに入られた「キリストの勝利」を予告するシンボルであると言われています。

今日の第一朗読は「主のしもべ」の第3の歌からです。

第2イザヤ(イザ40-55章)は、捕囚時代(紀元前6世紀)の預言で、そこには4つの「主のしもべの歌」と呼ばれるものが収められています。聖週間の間には、月曜日に第1の歌、火曜日に第2の歌、水曜日に第3の歌、聖金曜日に第4の歌と順に朗読されていきます。

神のこぼを受け、それを伝えたために迫害を受けた主のしもべをイスラエルの民全体の運命として、あるいは将来現れるメシアの姿としてイスラエルの民は理解してきました。初代教会の人々は、主の召命を受け、人類の罪を背負って苦難を受けたしもべの姿と十字架に架けられたキリストの姿を重ね合わせたのです。それで福音書記者は、人々は「イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら……」(マタ26章67節)と、イエスの受けた侮辱を記すのです。

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 2章6—11節

今日の第二朗読は古代教会のキリスト賛歌で。キリストの卑下と死にいたるまでの従順、それに続く高挙を表わしています。キリストの地上での生活は、しもべの姿、つまり仕える者、神と人々に奉仕する姿で要約されます。人々が救い主（メシア）に抱いていたイメージと、イエスの生涯にはギャップがありました。そこに神の神秘が秘められているということをこの賛歌は歌っています。

福音朗読：ルカによる福音書 23章1—49節

キリストの受難を思い起こす。A年はマタイ、B年はマルコ、C年はルカの受難の箇所。

味わいたいみことば

第一朗読

主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え 疲れた人を励ますように
言葉を呼び覚ましてくださる。

朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし

弟子として聞き従うようにしてくださる。(イザ 50章4節)

「主が～してくださる」。わたしたちは主によって変えられる。変えてくださる主の働きに身を委ねなければならぬ。

打とうとする者には背中をまかせ

ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。

顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。(イザ 50章6節)

しかし、主によって変えられることは、人々から嘲りの的となることを意味する。それでも、かまわない。主と結ばれているから。

第二朗読

かえって自分を無にして、(フィリ2章7節)

キリストと同じ心を持つ(フィリ2・5、フランシスコ会訳参照)。それこそが、最大で最高の応答の仕方。自分に固執せずに、無となっていく道が、呼びかけへの応答。

福音朗読

百人隊長はこの出来事を見て、神を賛美して言った。「本当に、この人は正しい人だった。」(ルカ 23章47節)

十字架を目の前にして、イエスさまのほんとうのことを分かった人は異邦人の百人隊長だけでした。主なる神に選ばれ、主なる神によって変えられた「主のしもべ」は自分を無にして主なる神に仕えようとし、そこに「正しさ」があるのです。神さまへと向かって行く「正しさ」があるのです。